

『涼州詞』 王 翰

『出塞(涼州詞)』 王之渙

兵士の心痛に涙する辺塞詩

辺塞詩とは

唐詩には送別の詩が多い。中央集権支配が確立して役人は地方に派遣され、あるいは左遷されたりするのが常であったので、当然別れの場面が多くなる。さらに唐帝国はその領土を万里の長城北部(今の内モンゴル)や西方(今のウイグル自治区・チベット自治区)に拡大したため、国境地帯では紛争が絶えない。従ってそこに赴任する官吏や兵士は少なくなかった。そういった辺境の、厳しい自然や兵士の生活、あるいは彼らを送る妻の心などを歌った詩を特に辺塞詩と呼ぶ。盛唐の王翰・王之渙・王昌齡・岑参らが有名な辺塞詩人である。

A 涼州の詞 王 翰

葡萄美酒夜光杯 葡萄の美酒夜光の杯

欲飲琵琶馬上催 飲んと欲して琵琶馬上に催す

醉臥沙場君莫笑 酔うて沙場に臥す君笑う莫れ

古來征戰幾人回 古來征戰幾人か回る

## 意 解

上等な葡萄酒を白玉製の杯に注ぎ、飲もうとすると琵琶の音が馬上からさあ飲みなさいと促す。酔っぱらってこの砂漠の上に倒れ伏しても君よ、笑わないでほしい。昔から西域との戦いに出て、いったい何人が無事に帰ってきたと  
いうのか。

B 出 塞 王 之 渾

黄河遠上白雲間 黄河遠く上る白雲の間

一片孤城萬仞山 一片の孤城萬仞の山

羌笛何須怨楊柳 羌笛何ぞ須いん楊柳を怨むを

春光不度玉門關 春光度らず玉門關

## 意 解

黄河を遠くさかのぼるとそれは白雲の中に消えて行く。そんな彼方の、聳え立つ嶺の上にぽつんと城塞が立っている。こんな異郷で羌族の吹く笛が折楊柳の曲を吹いて兵士を送っているが、どうか吹かないでほしい。これから向かう玉門関のさらに西は、柳はおろか、春の光さえ差し込まないほどの厳寒の地なのだから。

## 涼州はエキゾチックな町

涼州(今の武威)は都長安から700キロメートルはいつ

た辺境の町である。異民族制圧のため役所や軍隊が置かれていた。シルクロード沿線にも当たり西域に通ずる門戸でもあった。それゆえ両詩には中国でありながら異国情緒が漂っている。葡萄酒や夜光の杯、これらはシルクロードを經由して商人たちが西域から持ち込んだもので、いずれも貴重品である。そして琵琶もまたペルシャかアラビア生まれの楽器である。広漠とした砂漠も本土にはない異国の土地そのものと言える。もう一つはBの詩の羌笛である。先族は今のウイグル自治区の原住民と解しておくが、唐の時代には支配がこの地方まで完璧に行き届いているとは考えられない。自国のようにでありながら異民族の住む他国のような地域である。だから政府は厳重な警戒をする。玉門関にいたってはもうペルシャに近い感覚であろう。シルクロードはこの関を出るとローマに向かって続いている。

## スケールは唐詩随一

特にBの詩はそうである。まず長安が浮かぶ。政治も文化も戦争もここが出発点である。作者は涼州方面に左遷されたのだろうか。涼州は都か



玉門関

ら西700キロメートル。黄河はさらに上流に向かう。崑崙山脈が見えてきそうである。そして誰も住んでいない巨大な玉門関がそりたっている。長安からゆうに2000キロメートルを超した西北の地に読者は誘いこまれる。そこからローマに通ずるシルクロードと砂漠が展開する。兵士はさらに西に向かうという。

たった四行の中にユーラシア大陸がすっぽり収まっている。まるで衛星から地球を見るような壮大なパノラマに圧倒される。

### 兵士の心痛に涙する

両詩とも作者は従軍兵ではない。彼らを客観視してその心情を代弁しているのである。Aの詩は異郷にあつて死を覚悟した兵士の、Bの詩は郷愁をかき立てられながらも極寒の地に赴かなければならない兵士の、呻きにも似た悲痛な心がわれわれを打つのである。

### 絶句は歌われてこそ真価あり

唐代の小説「集異記」に次のようなエピソードが載っている。ある冬の日、詩人王昌齡・王之渙・高適の三人が料亭で酒宴を開いていた。四人の歌姫が歌を歌っている。王昌齡が言う。

「今夜この三人の中で誰の詩が一番多く歌われるか競争

しようではないか。」

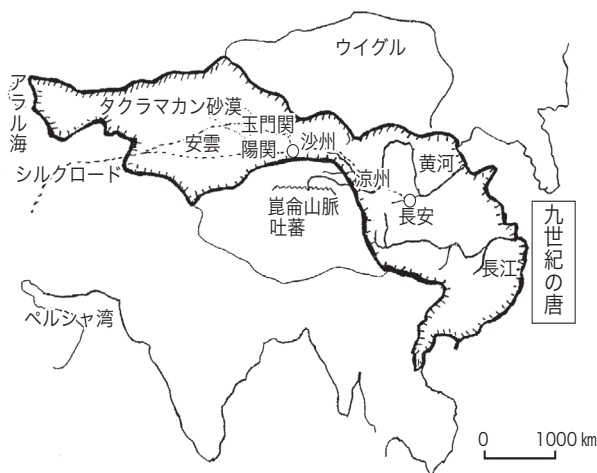
一人の歌姫が「寒雨江に連なり……」（芙蓉楼にて辛漸を送る

王昌齡）と歌った。

王昌齡は壁に「一絶句」と書いた。ついで二人目が高適の五言古詩を歌う。高適も「一絶句」と記した。

三人目はまた王昌齡の「長信秋詞」を歌った。彼は得意げに「二絶句」と書いた。二人の目は王之渙に注がれた。彼は毅然として公言した。「あの四人のうちで最も美しいあの女性が歌う詩がもし私のものでなかったら、今から生涯君たちと詩を争わないよ。」やがてその美女は果たして「黄河遠く上る白雲の……」と歌ったのであった。王之渙は大いに自慢した。歌姫たちは「何事か」と聞いて初めてこの三人が高名な詩人であることを知った。三人は快飲したという。おそらく作り話であろうが、当時絶句はこういう場所

で人々の間で歌われていたことは事実であろう。（参考「唐詩選」明治書院）



良い歌が多くの人に愛唱されるのは今も昔も変わらない  
ことなのである。